
天使に恋をした悪魔

四季道理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使に恋をした悪魔

【Nコード】

N1284L

【作者名】

四季道理

【あらすじ】

かつて木の股から生まれ落ちて間もない頃に、悪魔は白い天使に出会った。白い天使は、黒い生き物を残酷な悪魔だと知っていて、幼子を育てる。やがて、悪魔は成長し……。

かつて。

「それ」を前に、思わず手をのばしていた。

眼に映るのは、幼い自分の手。

生まれ落ちてまだ時はそれほど過ぎておらず、飛ぶこともできない自分の羽がはじめてもどかしいと思った。

それまで空を飛ぶことなど憧れたこともなかったのに。

「あー」

言葉さえも操れない。

幼子。

だが、それでも「それ」の背を飾る真っ白い羽がとてもきれいだと思っ
て……それだけは真実の瞬間^{とき}。

それから、1年の時が流れた。

「わ、待って。あーちゃん」

いつまでも子供扱いする「それ」が腹立たしく。

「うるさい…」

思わず乱暴な口調になってしまう。

びっくりするようなまなざしを自分へ向けてくるが、その色には心配するものだけ。

「それ」には、腹立たしいなどという感情はない。他の生き物のようにおびえているというわけでもない。

赤子の姿から、1年経ずして大人へと変わった自分が何かも分かっているはずだ。

おびえても良いのだ。

自分は「それ」とは違う。

おびえてくれれば、簡単にこれまでしてきたように引き裂いてしまふのに。

誰よりもか弱い存在なのに・・・自分を庇護する存在と思って止まない。

同時に、自分の仲間からも、こんな存在にとらわれた自分をあざける声が止まない。

だが、決して弱いわけではなかった。

あざけた仲間たちは、引き裂き、二度とその声を上げられぬほどの痛みを負わせた。

同時に自分が何であるかを痛感する瞬間でもあった。

仲間であっても、生きているものを切り裂き、引き裂き、その断末魔を聞く快感。その甘美なこと。

そして想像する。

「それ」を同じようにしたら、自分はどんな気分になるだろう……。

4

「あーちゃん」

沈黙した自分にいつものようにそっと手を伸ばして、自分のゴワゴワした漆黒の髪を撫でてくる。

白い生き物。

神が天使と名付けたその生き物は、儚く、誰にでも優しい。そう……
・天使の敵である悪魔にでさえも。

無防備に。

自分がどんな風に見られているかも知らないで。

「触るな」

その手を振り払わなければ……。

大人になるということは、心が黒く塗り替えられていくということ。

完全にこの心が黒くなってしまえば、「それ」を引き裂くなど容易いこと。

だから、その前に離れなければ。

嗚呼。

「大丈夫？」

なのに、なぜ振り払えない。

どうして抱き寄せてしまう。

いつの間にか、自分よりもずいぶん小さくなってしまった「それ」を腕の中に収め。

ふわふわとして、きらきらと金色に輝く髪に唇を埋め。

甘い匂いに酔う。

「あーちゃん。大好き」

抱き返してくる細い腕^{かいな}。

その体を心ごと引き裂きたい。

「それ」から流れ落ちる血で全身をぬらし、のどから出る断末魔に浸りたい。

「天ちゃん」

なのに。

こぼれ落ちたのは、自分の口からこぼれたとは思えないほど小さな声だけ。

いつそのことあの瞬間に見え^{まみ}なければ良かったのに・・・と。

そう思えない自分が呪わしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1284/>

天使に恋をした悪魔

2010年11月30日07時05分発行